

講演1

「キャリア意識と大学教育」

東京大学大学院教育学・研究科長 教育学部長 金子元久

本日はこのような機会をいただきまして、ありがとうございます。私がこういった場でお話をする一つの目的は、色々な先生方にご意見をいただいて、自分の考え方を補正していこうということです。ですので、是非ともご意見、ご批判をいただきたいと思います。

今日は、「キャリア意識と大学教育」という題でお話をさせていただくことになっております。午前中からの話を伺っていて、キャリア意識をキーとしてお話をするというのはどういう意味か、ということを考えなければいけない、と思いました。ついでながら、午前中の話を聞いていましたら、東京大学は大体権力主義者だという話がありました(笑)。私は東京大学で教育学の研究科長をやっております、中教審にも出ていますので、下を向いてお話をしなければいけないかもしれませんが(笑)。

研究者として、キャリア意識を問題にするのはどういうことかと考えてみますと、キャリア意識を中心として大学教育を考えるというのは意味があることだと思います。ではどういうことがその理由なのか。いくつか理由があると思うんですね。

一つは、よく言われていることですが、キャリア意識が未熟なので、就職にミスマッチが起きている。やはりキャリア意識を育てること自体が非常に重要な問題である、ということです。

それからもう一つ、将来の目的が明確でないことが大学教育が十分に機能しない理由になっているといえますか、学生がちゃんと勉強しない理由であるのではないのか、という意識が一般的にあるだろうと思います。

それともう一つは、教育内容が職業生活にもっと端的に結びつくべきである、という考え方も社会にはかなり強くある。

そういう意味で、この講演の「キャリア意識と大学教育」という題は、京都大学高等教育研究開発推進センターと電通育英会との間の話し合いで決められたのだと思いますが、やはり社会の側では、確かにこういった問題意識を非常に強く持たれているだろう、ということは分かるわけです。

ただ私は、本当にこういったことや、こういった問題の立て方が事実であるのかどうか、と考えます。それから、言われていることとは少し違った視点から考えてみる必要もあるのではないかと思います。そうした上で、では何が必要なのか、ということについて考えてみたいと思います。

具体的に今日の話は4点あります。一つはやはり、若者の変化。若者が変化しているのではないかということ。これはこれまでの発表でも取り上げられた点です。次に、我々が持っている古典的な大学教育が恐らく空洞化してしまっている、ということ。そういった点についてお話ししたい。

それから3番目に、キャリアというものと大学を結びつける、その結びつき方にどういったことがあるのかということについても、もう少し体系立てて考えてみたらどうか、ということをお願いしたいと思います。

最後にその上で、大学教育に何が求められているのか、ということについて私の考えているところをお話してみたいと思います。

まず最初に若者の変化ですけれども、色々な意味で学生が変わってきた、ということが指摘されています。今は大学全入時代ですから、大学が入学試験をしないで学生を大学に入れる、というようなところが随分たくさん出てきました。私どもが調査したのを見ますと、去年大学に入った高校生の大体4割くらいは、いわゆる大学の入試を受けないで大学に入っています。一芸入試とか様々なものがあるのですが、いわゆる学力試験で入っていない、というのが既にそこまで来ています。

それからご存じように、これもよく言われることですが、ニートとか、大卒無業とか、そういった現象も起きているわけです。生活のために努力をするという姿勢が薄れている、というふうに一般的に言われています。

こうしたことを総合して、豊かな社会の中で若者が無気力になり、自分が欲しいものがよく分からなくなっているのではないかと、といったことが、通常よく指摘されているところではあります。

ただ私は、確かにそういったことはあるとは思いますが、もう一方で、若者が置かれている環境も変化している、ということも非常に重要なのではないかと、思うわけです。例えば労働市場は、いま非常に大きく流動化しています。少し前までは、良い大学を出て良い企業に入ると、大体そこで一生を終えていたわけですが、いまは競争力の高い企業ほど、50歳前後、あるいは50歳より前で退職しなければならない、第二のキャリアを始めなければいけない、というふうになっています。

社会が流動化して、いままでの固定的な、良い大学良い会社に行く、といったものも相当大きなリスクを抱えている。将来はあまりよく見えない。しかも、やっている事業自体も、これまではかなり明確なイメージを持ちやすい事業でしたけれども、いまは様々な会社が色々な仕事をやっていて、それがさらに常に流動化している、という状況になっています。

そうすると、若者が自分の社会的な役割について明確な役割を持ちにくい、というのはむしろ当たり前なのではないか。そう考えてみると、最初からこういうことを申し上げては何ですが、キャリア意識を問題にするというのは、いかにも、いままでの大人はキャリア意識を明確に持っており、いまの若者は持っていない、かのごとくに言っているように聞こえるわけですが、実は昔の人もキャリア意識を明確に持っていたかどうかは相当怪しいと私は思います。

おそらく以前は一定のイメージがあった。良い大学に行けば一定の大企業に行ける。そこで一定の生活水準を達成することができる。そういったイメージはあったかもしれませんが、しかし多くのいわゆるサラリーマンに、キャリア意識が本当にあったかどうか。私は相当疑わしいと思います。

ただ、いまになって更にそういった見通しが持ちにくくなっていることは事実でしょう。そういった意味で、キャリア意識の視線から問題を論じることは重要だと思いますけれども、ただ、キャリア意識というものを昔からみんなが明確に持って、それに従って生きてきた、というのは本当ではないと思います。いつの時代でもやはりこれは課題なわけで、いま特にそれが困難になっているために問われている、ということだろうと思います。

そうしますと、若者を取り巻く環境が異なり、キャリア意識も異なってくる、それがどのように変化しているのか、ということをごきちんと認識していくことが必要だと言えらると思います。

それともう一つ、これは自明かもしれませんが、高等教育がユニバーサル化している時代というものはどういう意味を持っているのか、ということも確認しておく必要があると思います。

戦後50年、日本の高等教育は大衆化し拡大し続けてきたわけですが、これは言うてみれば、大学進学に対する制約の時代だったと思います。そこでは、学力や家庭所得や住んでいる地域というのが進路選択の制約でした。そうした制約の中で最も良い将来を選び、それを実現するために努力する。それが、日本の学生の特徴として、いままで当然だと受け取られてきたわけです。

高等教育がユニバーサル化された時代とは、こういった制約が相対化しているということだと思います。そして、選択の幅が広がる。広がってしまうと、自分が本当は何をしたいのか、ということが再び問われる。すると、実は自分が何をしたいのかよく分からなくなってしまう。したがって努力する目標が見つかりにくくなる。努力する目標が見つからないので努力しない。そのために更に努力する方向が見つかりにくくなる。

こうして、自分に対する認識、つまり自己認識、あるいは社会の中での自分の役割への認識、つまり社会認識、そのいずれもが低い状態が永続する、という構造が生まれやすい時代になっています。

繰り返しになりますが、機会が増えていることがむしろ努力の目標を見えにくくしている、そういったことは多分あるんだろうと思います。問題はその中で、学生がどのように変わっているのか、それをどのように対処していくか、ということだろうと思います。

よく言われるのは、全入化したことで学生は勉強しなくなった、ということです。

これ(スライド)は、私どものセンターで行った高校3年生の追跡調査の結果です。4年前に高校3年生だった人たちを、4000人くらい追跡調査したものです。その人たちが高卒後にどういった進路を歩んだか、ということと、高校3年のときにどれくらい勉強したか、ということをつき合わせてみたデータです。グラフは上から平均、高校卒業後すぐに就職した人、短大・専門学校に行った人、大学進学した人、と分けています。

それで、高校3年のときにどのくらい勉強していたか、ということですが、赤いのはほとんどしない、と言う人。その次が30分程度、1日のうちですからほとんどしていないと同じだと思います。その次が1時間以上、2時間、3時間、4時間以上、ということです。

全体として見ますと、半分近くはほとんど勉強しないという状況にいまの日本の高校生はなっているわけです。ただ当然ながら、進路別でかなり状況が異なっていて、就職している人の勉強時間はやはり少ない。短大・専門学校に行っている人もあまり多い人は少ない。大学進学している人の方が、勉強時間は多い。

しかし、大学に進学した人の中でも、大体3割は勉強時間が1日1時間に達していない、というのがいまの状況です。もちろん、一方では1日4時間くらい勉強していた、という人も3割くらいいるわけで、高校3年生が非常に大きく分化しているといえる。大学進学者の中に、様々なタイプといえますか、非常に違うタイプの人ができる、ということです。

こういった勉強時間の差が大学の選抜性に関わることは当然です。選抜性の高い大学に入ろうとしていた人たちはよく勉強していますし、そうでないところはあまり勉強しない。一般的にはそうです。しかし、かなり選抜性が高いと思われていた大学に入ってくる学生も、実は、普通の入試を受けていない人は相当多くて、あまり勉強時間がない人もかなり入っているんですね。勉強しないと入れない大学というのはすごく少なくなっています。少なくとも、かなり優秀だと思われている、一般的には学力が高いと思われている大学でも、学生の中に相当ばらつきができています。これは非常に重要なことだろうと思います。

これは、例えば東大でもそういったことが起こっていると思います。一般的に揃っているというよりは、やはり少し、以前と比べればかなりばらつきができています。例えば数学などの能力は、かなり大きな差があるようになっています。いずれにしても、これまでのような、受験体制によって勉強を強制することが一定の学力、あるいは勉強する習慣のようなものを保証していた、という時代は過ぎているということです。

それからもう一つ、学力よりも、大学に入るときにどういったことをやりたいのか、という意識自体が実はあまりはっきりしていない、ということも事実です。これ(スライド)は、「やりたいことがみつからない」ということについて、ほとんどない、あまりない、ときどきある、よくある、という回答方法で答えてもらったものです。これは私どもが昨年・昨年に行った大学生の調査で、130大学で回答数は5万人程度という非常に大規模な調査です。これ

を見ますと、やはり、「やりたいことがみつからない」ということが、「ときどきある」、「よくある」というのが実はかなり大きい。両者を合わせると大体4割、5割近いという状況です。

「やりたいことがみつからない」ということでは、「卒業後にやりたいことがみつからない」と回答する人も半分くらいはいるわけです。この図(スライド)は1年2年3年4年とデータを取っていますが、細かく見ると、3年生になるまで「みつからない」という人が少しずつ増えていて、4年生になると、これは就職活動が終わるといふか、かなり就職先が決まるからだと思いますが、少し減ります。

ただ、むしろここで非常に重要なのは、学年を追ってもあまり明確な変化が起きていない、ということだと思います。大学教育の結果として「やりたいことが見つかる」ということは、少なくともあまり明確に起こってはいないのではないかと見られるわけです。さらに、「卒業後にやりたいことが決まっている」と答える学生についても同様でして、大体4割は卒業後にやりたいことがまだ決まっていない。さすがに4年生になるとその数は減りますが、しかしなお、卒業する直前になっても、やはり3割くらいは卒業後にやりたいことが決まっていない、と答えています。

大学に入ってから、あるいは卒業直前になっても、自分がやりたいのか、ということが必ずしも明確ではないというタイプの学生が増えている、これは事実だろうと思います。

こうした中で、私はやはり、古典的な大学教育の理念が空洞化してきたと思うわけです。伝統的な大学教育というもの、もうこういった理念を申し上げても通用しない、とおっしゃる先生方は多いかもしれませんが、しかしやはり私は、どこか日本の大学はこういったことを信じている、一種の信仰があると思うわけです。

つまり、学生は既に大人であって、将来の展望を持って大学を選択してきている。当然、文章を書いたり人とコミュニケーションする能力は高校までに身に付いている。したがって授業に期待するのは、知的な刺激である。あとは自分で勉強すればいい。であるから、大学教育のあり方というのは、学部学科の考え方に早く導入する、とにかく専門分野の考え方に早く導入する。学部の専門的知識を身につけさせる。結局教育というのは、最先端の研究で何をやっているのか、ということを見せて刺激をすればいいんだ、知的刺激を与えられればいいんだ、という考え方です。

これは、ほぼ200年前にドイツ・ベルリン大学ができたときに、シュライエアマッハーという人が言った大学の理念を反映したものです。基本的に大学には、その学問の自由と、学習の自由という2つがあって、学生は基本的には自由にさせておくべきだ、その中で自分で勉強するのが大学である、という考え方だと思います。

午前中の梶田先生のお話でも、「自分は全然教えてもらわなかった」とおっしゃられていましたが、ああいったことをかなり誇り高くおっしゃっているところが面白いわけで、むしろ日本の大学というのはそういうものだ、とみんな思っていたと思うんです。それで別にいいではないか、と一般的に大学も言っていましたし、社会もそう見ていた。

むしろ、こういった考え方はやはり日本の大学人の間には強いと思いますし、マスコミの人と対応していても、色々と議論していると、マスコミの人たちも実はこういうイメージをかなり持っている。学生が「他の人に教えてもらいたい」とかいうと、けしからんというわけです。しかしマスコミの人は、実は本心ではそう思っているけれども、報道するときには「ちゃんと大学は教えなければならない」と言っているわけで、社会の側でも大学のあり方について相当大きな混乱があると私は思います。

それをどのように、従来の考え方の問題点をどのように克服していくのか。どこがおかしかったのか、ということを確認することは非常に重要だと思います。

実際のところ、こういったモデルが昔も多くの人に受け入れられていたかどうかは疑問です。教えられなくて

も勉強していた人ばかりでは必ずしもなかったのではないかと、思います。むしろ重要なのは、大学が教えることを要求される時代になっているということです。かつての考え方のままでは通用しなくなっている、批判されざるをえない、というところが問題なのではないか、と思います。

そういう風に考えてみると、これも今回のフォーラムの前半で何度か出てきた話ですが、大学教育を考えると重要なのは、大学のどういった教育をよくするかということだけではなくて、それが学生とどのように、学生のニーズにどのように対応しているのか、それを考えることが必要なのではないかと、ということです。

大学の教育というのは、授業をどのようにやっているかとか、教員がどういう姿勢で教えるかとか、カリキュラムとか、教育組織とか、あるいはその理念とか教育がどのように組織されてやっているものか、そういった教育側の要因もありますけれども、もう一方で学生の側についても、例えば専門教科の学力とか基礎学力とか勉強の習慣とか、そういった学力に直に関係する問題でもあります。あるいは社会認識といいますが、大学教育が自分にとってどういう役に立つのか、どういう意味があるのか、ということについての位置付け。あるいは更に、自分が社会の中でどのような役割を果たすべきか、ということについてどう捉えているのか。さらに自己認識といいますが、自分は本来何をしたいと思っているのか、あるいは自分はどの程度そういったことをやる自信があるのか。そういった、もうちょっと内面的な問題、そういったものも学生の側の要因としては重要であるということです。これら2つの要因がどのように対応するのか、ということが問題だろうと私は思います。

それでこういった図式(スライド 11)を考えてみました。

大学の側が本来何を目的として、どういった学生を育てようとしているのか。どういった範囲の学生を、どういったふうな学生をどのように育てようとしているのか。私はこれを「大学教育の射程」というふうに呼んでいますけども、上下で、大学教育の射程に入る、入らない、と分けるとします。横軸には、学生が自分をどのように認識しているのか。それからもう一つは、自分が社会の中でどういう役割を果たそうとしているのか、それについて確信のあるタイプ。左側の方に、そういった自己認識・社会認識が比較的低い学生を、右側の方に、そういった自己認識・社会認識が高い学生というのを軸として作るとします。そうしますと4次元になりまして、4つの学生タイプができることとなります。

一つは高同調。大学がやりたいことと、自分がやりたいこと、こうなりたいこと、というのが一致しているタイプです。これを私は高同調と呼ぶわけですが、目的意識をきちんと持っている、大学教育の目標と自分のやりたいことが一致している、というタイプです。

それから、独立型と私は呼ぶんですけども、自分はやりたいことはきちんとしている、でも大学教育は自分のやりたいことと必ずしも一致していない、だから大学教育は勝手にやりたいことをやってくれ、自分はあとで自分で勉強する、というタイプがあると思います。十年程前に東京大学で学生調査をやったときに、どういう授業がいいのか、といったことを聞いたんですが、自由回答に「こういう調査をやるということは、授業をよりよくしようという目的なのだろう。しかし私にとってそれは迷惑だ。自分はやりたいことは決まっているんだから、大学教育を妙に良くして自分を拘束するのはやめてくれ」と回答してきた学生がいました。これはある意味では見事な例で、これまでの大学生はかなりそういった学生がいたと思います。東大よりもむしろ京大の方がそういった学生が多いのではないかと、あるいは先生でもそういうことを公言する人が結構多いように私は聞いていますが。ともかく、これは決して今までの大学教育では少ないタイプではありません。

もう一つは、受容型といいますが、自分はあまりはっきりとやりたいことがわからないんだけど、しかしせっかくなら大学に入ったんだから大学で教えられることはきちんと勉強しよう、その上で色んなことを考えよう、というタイプです。

もう一つは、疎外型。自分は何をしたいのかが良く分からない、自分に自信がない、しかし同時に大学教育

がやっていることも自分にとってあまり意味があるとは思えない。こういったタイプの人です。こういった学生はかなり増えているのではないかと思います。

私どもが行った大学生調査の結果を、これに当てはめて解釈すると、これはもちろんかなり概念的な話ですから、実際のアンケート調査の結果と重ね合わせるのには難しいところがあるのですが、一つの例としてやってみたのがこういう結果(スライド 12)です。高同調型は 4 割くらいいました。しかし、疎外型が非常に多く、3 割くらいはいる。あとは独立型 2 割、受容型 1 割程度、という結果でした。繰り返しますが、これはアンケートの設問の仕方などによって数字は変わるとは思いますが、つまり、高同調型というのは決してマジョリティではなく、他のタイプも相当いる、ということです。

そして、これもこれまでの議論で出ていましたが、高同調型が特に多いのは、医薬系です。先の議論では 6 年制どうこうという表現がありましたが、むしろ医薬系というよりも、薬学、それから看護など医学関係の専門職関係とか、そういったものに一般にこの傾向が強いです。それから教育学系、特に教員養成系学部もこの傾向が少し強いところがあります。芸術系も同様です。

しかし、他の学部はかなり、みな一様に、高同調系がそんなに多くありません。社会科学系で特に高同調系が少ないというのは予測していましたが、むしろ面白かったのは工学系です。工学系が意外に高同調が少ない。かなりエネルギーを必要とされる授業を取っているにも関わらず、自分に適した教育を受けていると必ずしも思っていないタイプがかなり多いということです。

こういうふうに考えてみますと、このタイプ別というのは、色んな意味があると思います。まず第一に申し上げておきたいのは、このようにタイプ別に分けましたが、これは必ずしも良し悪しではないということです。自分の進む道がかなり早く決まって、その通り進んで、そのままずっとそのキャリアを辿っていく、それはそれで重要です。しかし様々な面から、この高同調型の人には視野が狭いといえますか、自分に対する自信も必ずしも強いところがあるとは限りません。もちろん、疎外型の人には色んな問題があるでしょうけれども、しかし、この人たちは言わば悩む力を持っているわけで、様々なものを探求するという側面をもっている。また独立型は、いままでの色々な大学生で、これはこれで容認されてきた、むしろ企業に行く人にとってはむしろこっちの方がノーマルなタイプではなかったかと思えます。この人たちも、例えばコミュニケーション能力とか、特に社会についての視野とかいった点については、必ずしも自分でそんなに自信を持っているわけではありません。それぞれ、大きな問題を抱えていると思います。しかもこれは変化する可能性のあるものです。

しかし、こういったモチベーション、あるいは自分に対する認識と、それから大学教育が自分にもつ意味の認識というのは、かなり大きな影響を学生に与えています。例えば(スライド 13)、いまの学生類型について分類した上で、大学教育にどれくらい満足度を持っているか、ということについて見てみると、これは明らかに同調型で高い。当たり前かもしれませんが、約 8 割が大体満足と言っています。しかし疎外型についてはやはり不満がかなり多い。あるいは独立型についても相当多い。

ただ、満足度はかなり不完全な指標でして、同調型でも結構不満も多い。あるいは疎外型、受容型でも結構満足しているといえますか、そういう面も見えなくもない。それから、午前中に梶田先生が「京大でも大学に対する満足度が上がっている」とおっしゃっていましたが、実はこの満足度は、ここ 5 年くらいかなり全国の大学で上がっているんですね。我々としては、どうしてなのか、その理由が少し分からないところもありますが、しかし少なくとも、ここ 10 年か 5 年くらいの間で、大学がかなり気を使うようになってきていることは事実だと思います。

したがって、大学が親切になっていることがこうした結果に反映されているのだと思います。方々の学長さん

はそれでいい気になっていて、うちの学長も上がっているとか言っていました。しかし問題は、多少満足度が上がっているだけであって、本来はどうあるべきか、ということを知らないということです。

例えば私どもの東大の学生調査でも、アメリカの大学に短期留学した学生が「自分はアメリカの中程度の公立大学に留学したけど、そこで受けた教育体系のインパクトと東大の教育のインパクトは全く違う」と書いていました。そうして比較すれば、相当強い不満ができるのだと思います。そういう意味で、満足度は既にあまり良い指標ではなくなっていると私は思います。

もう一つの大きな傾向は、大学に入る前にあまり明確な目標を持っていないということと対応しているわけですが、「卒業後にやりたいこと」、それから「授業がやりたいことに関わっている」という割合は、全く当てはまらない、当てはまらない、という割合がかなり高い。4割近くはそうです。

ただ、むしろ注目すべきは、「授業を通じてやりたいことを見つけたい」ということです。これはかなりの人たちがそう思っている。授業に対する期待は実は高いんです。要するに大学の課題としては、大学が学問を教えているだけであれば、授業を通じてこういった期待に応えることができるのかどうか、ということ。基本的にそこが大きな問題だと思います。

そういった期待に応えることを意図して授業をやり、教育をやっているのか。そういったものを前提とした教育をするのか、それともそういったものが形成されるようなプロセスとしての授業を作るのか。これは非常に大きな問題だろうと思うんです。これはまた後で申し上げます。

これも先ほどまでの議論に出ていましたが、学生生活について見てみますと(スライド 15)、一つ明らかなのは、現代の学生はサークルに使う時間がかなり少なくなっている。少なくとも、サークルを全然やらない学生が相当いる、ということです。一方で非常にサークルに熱心な学生がいて、一週間に6時間以上やっている学生が4分の1ほどいますが、全くやらない学生が半分くらいになっている。

ところが、アルバイトをやる学生は多いです。一週間に6時間以上やる学生が5割以上います。アルバイトは非常に大きい。アルバイトの意味が非常に大きくなっている。

これは何か。これまで日本の大学はサークルなどで社会性を身に付けるというようなことが言われていたわけですが、実はいまの学生はサークルに対してあまりコミットしなくなってきた。そうすると、もちろん金銭的な必要性もありますけれども、潜在的に、むしろ社会性を、社会というものに対する経験をアルバイトに求めているという学生が大きいのではないかと思います。

実際、家庭の所得階級等々について調べてみると、ある程度関係はありますが、むしろ自分が何をやりたいのかというのが、大学での授業と大学での教育と重なっているかいないか、ということがかなり大きな要因になっているようです。

結果として、アルバイトは経済上の要因だけではなく、勉強へのコミットメントにもつながっています。これ(スライド 16)は大学での授業はやりたいことに関わっている、という回答とアルバイトの時間を比較したのですが、大学の授業はやりたいことに関わっていると回答している人はアルバイトの時間が比較的少ない。少なくともヘビーにアルバイトする層が少ない。一方、大学でやっていることと自分があまり関わっていないという人は、かなりヘビーなアルバイトの経験をしているということがわかりました。

先ほど、電通の調査のお話を聞いていましたら、アルバイトは教育効果がそんなに大きくないという結果が出たそうですが、多分そういうこともあるでしょう。しかし少なくとも、学生は何らかの形の社会的な体験を求めている、それがアルバイトに向かっている。ただ当然ながら、アルバイトがそういった経験を与えるかどうかは疑

間である。それは当然そうだろうと思います。そういった意味でも、やはり大学教育が何をするのか、ということ
は問われるわけです。

次に、大学教育と仕事とはどういう関係があるのか、という問題です。これについてよくある直線的な考え方は次のようなものです。

基礎教育では算数理科国語社会を勉強する、それを基礎に大学では専門基礎学力を身に付ける、それが
専門分野での職業的な知識の習得の学習に発展する、それが職業で必要とされる知識・技能につながる。

これはなんといいいますか、かなり直線的な大学教育と仕事との関係です。従来もこういったことは必要だと信
じている人が非常に多かったらうと思いますし、特に最近では大学教育がユニバーサル化して、むしろ大学
教育で手に職をつければいけないという考え方も非常に多いようです。

ただ、こういった考え方にはかなり大きな問題点があると思います。実際、様々な調査結果を見てみますと、
大学卒業生で、大学で習った知識を直接に生かしている人というのは実は非常に少ないわけです。もちろん、
例えば医学部、歯学部卒業生、あるいは法学部で弁護士になった人、そういう人たちは大学で受けた勉強
が直接非常に大きな意味を持っているでしょう。

しかしいわゆるサラリーマンで、工学部も理系の卒業生も含めて、大学で習った知識を直接使っている人は
非常に少ない。その一つの理由は、大学で習った知識が細分化しすぎていて、企業で習うこととずれることが
当たり前だということです。企業の人、特に理系の企業の人とお話すると常に言われるのは、大学教育はむし
ろ基礎をやっていない、専門化しすぎている、ということです。しかし大学の側からしてみれば、何が基礎な
のが良く分からない。自分たちがやっている研究に参加することが最大の教育なのだ、と信じていますから、ど
うしても細分化する、あるいは最新の知識に近づく傾向があります。

もう一つは、職場で必要とされる知識というのは非常に急速に変化しているわけです。これはどんな職場で
もそうでしょうけれども、大学で習った職業知識がそのまま何年も持つということはまずありません。特に現代の
企業は様々な知識を結合させつつ進歩していきますし、その結合のさせ方あるいは進展の早さが競争力を決
めるわけですから、そこどころが非常に大きな変化を持っている。それに対応するような知識をそのまま供給
することは、これは無理なわけです。また、当然、産業構造も変化します。

さきほど、医歯薬系は将来のやることははっきりしていて、満足度が比較的高い、学習のモチベーションも
高い、と申し上げました。特に薬学科は、薬剤師になるという将来のイメージがあって、またそれは子供にとっ
てもどういう仕事なのかが明確なイメージだと思います。そして、それをやるというふうに決めて大学に入って、
薬学の勉強をする。かなりストレートでわかりやすい考え方です。ですから、かなりカリキュラムが濃密であつて
も、学生は結構キャッチアップしています。

ただそれに関して私は二つ考えることがあります。一つは、薬歯系の人たちは確かにモチベーションは高い
ですが、授業関連以外の勉強が非常に少ないです。それは忙しいこともあるかもしれませんが、しかしそれで
本当に将来大丈夫かな、と思います。もう一つは、これは薬学の専門の方に聞いたんですけど、いま薬学
部は、これは皆さんご存じでしょうけれども、ものすごく急速に薬学部の数が増えていまして、もはや薬剤師が
普通の薬剤師の仕事で食べていける時代ではないそうです。薬剤師は色んな機能を持たなければならない。
例えば小売のセールスですとか、あるいはもうちょっと薬剤師に関して機能を広げて、簡単な健康相談みたい
な、特に高齢者に対してはそういったこともできるような、そういった機能を付け加えるべきじゃないかという議
論もあるそうです。とにかく、従来の、非常に狭く定義された薬学の知識で、将来そのままずっと食べていける
かということこれはかなり怪しいわけです。そういうことができる分野は相当限られている。そういう危険があるん

ですね。

そういったことを考えてみますと、専門知識のリンクというのは重要ですが、それだけでは不十分だと思いますし、それから相当の分野ではそれは通用しない。それに対して、どういったオルタナティブができていくかという、この頃よく言われるようになったのは基礎能力といえますか、コアコンピテンスという考え方です。

これは経済産業省なども言っていますし、国際的にもかなり大きなブームです。90年代のはじめからアメリカやヨーロッパで言われたことで、教科や学問領域に限らず、仕事で使う基礎的な能力がある、それが重要なんだ、という考え方です。

これを先ほどの図式に当てはめて考えるとこういうことだと思います。学校で教科の勉強をします。それは専門基礎学力をつくり、大学で習う学力というか勉強につながるわけです。しかし実は、その背後にあって、なおかつより重要なのは、教科の勉強をするということは、勉強の意欲や勉強の習慣、あるいは非常に基礎的な読み書きや推理能力といったものを作っている。それも一種の基礎能力なんだ、ということです。

実は大学でも同様であって、比較的選抜性の高い大学の卒業生が企業に好まれるというのは、むしろその入学試験で中学高校までに作られた能力に注目しているからです。企業はそれを見て自分のところに採用して、それを自分の職場内の訓練に結び付けて、自分の職場に必要な知識を与える。それが、日本的な生産性を支えている。

実は今までの日本の大学教育のあり方とか企業のあり方というのは、かなりそういったところを使っていたんだと思います。就職支援のときに、どれくらい専門知識を持っていますか、というようなことはほとんど聞かないわけです。特に学士課程の卒業者の場合は、むしろ彼らが着目しているのは、基礎能力とか意欲とかそういうことです。

先ほどの発表に、就職に成功している人は比較的朗らかであるとかリーダーシップがあるとかそういった人たちだ、というものがありましたが、あれは当たり前で、企業の人はいそれを見ています。だから当然、そういったタイプの人、自己イメージでもそういったイメージを持っている人は早く就職を決める、となるのだと思います。日本の企業は、かなりこういったことに着目している。

ただ、やっぱり日本の企業はこれではだめだ、と言い始めているわけです。それはいくつか理由があります。

一つは基礎能力があるだけで、職場の中だけで知識を供給できるのか、ということ。これができないように段々なりつつあるわけです。それはつまり、職場の中で、いままであった知識に少しずつ積み重ねていくという意味で、知識は伝達されるかもしれませんが。例えば日本の製造業やサービス業は、非常にきめ細かな対応をしている。そういう意味での生産性を高めるにはこういったアプローチが役に立つかもしれませんが、かなりドラスティックに変化が起こる場合、違う知識を導入しなければならない場合、それは職場内に蓄積された知識だけに頼ってはできないと思います。そういった意味でも非常にチャレンジされているんだと思います。

そういう風に考えてみますと、基礎能力という考え方にも実は相当問題があるんじゃないかということになります。

一つは、内容がやっぱりあいまいだということです。これは経済産業省が委員会を作りまして、学校と職業を結びつけるにはコンピテンスみたいなのが必要だということを言っているわけですが、その内容を見ますと、大体誰でも褒めるような内容です。非常に前向き、きちんとやる、論理的に考えられる、ちゃんとしゃべれる。これは、高校中学そして家庭、そういったところで大体出来るようなものです。

逆に言うと、下手をすると、これも先ほどの議論にありましたが、家庭が大切だということになりますと、これは

基本的に社会的な階層をそのまま認めることになってしまう論理です。良い家に生まれ、良いしつけをして、良い学校に行っていれば、良い能力があるんだから、良い企業が取るのは当たり前だ、そっちの方が能力あるんだ、という議論になってしまう。

このコンピテンスというのは、定義の仕方によっては相当色んな意味合いを持ってくる場所だと思います。重要なのは、そういったことは重要だと思いますけれども、ただそれは変わりうるものとして考えておかないと、やはり教育は、教育者としての責任は果たせない。ひいては社会的にも非常に大きな問題ができるということになると思うんです。

ただ、コンピテンスというものを考えることは重要だと思います。これに関しては色んな考え方がありますが、私はこれには3つの側面があると思っています。

一つは思考能力(批判的、論理的思考能力)。あるいはコミュニケーション(文章を書く、会話をする、それから多文化、マルチカルチュラル)。それから意欲(熱意、倫理性、前向きな態度)、等々。

ただ、最大の問題は、これが家でできるものだ、というふうになってしまうと、教育機関は責任放棄することになってしまいますし、繰り返しますが、社会的にも実は望ましくない。問題は、大学がこういったものをどうやって作っていくか、大学教育がどうやってこういうものを作っていくのか、ということだと思います。

それからもう一つ、先ほどからの発表を聞いてちょっと気になったのですが、高校までの勉強時間が大学に入ってから勉強時間に影響するというのは、それは当たり前なんです。誰が考えても当たり前だと思います。実際我々の調査でもそれははっきり出てきます。

問題は、勉強の習慣のない人をどうやって変えていくのか。大学という新しい環境の中でそういうことができるのかどうかということです。それまでの条件が非常に大きな影響を与えるのは当然です。それと独立に大学が何をできるか、ということをお問わないと、ユニバーサル化時代の大学教育というのは成り立たないし、意味がない。あるいは職業キャリア意識ということを論ずる意味がそもそもなくなってくると思います。

そういった点から考えて、やはり重要なのは、大学教育で一方で専門的な知識技能を教えるわけですが、もう一方で、基礎的な能力っていうものが社会にとって要求されている、これは事実です。しかし基礎的なコンピテンスそのものを教えることは非常に難しい。例えば前向きに意欲を持ってとか言って、それで前向きだったら2単位とか、そういうことをやってもあまり意味がない。大学によっては、教養科目でキャリア教育と称して、お客様にどうやって名刺を渡すかとかお茶の出し方とか色々やって、それが一種のしつけになるとか言っていますが、それはそれでやってもいいのかもしれませんが、それはしかし、そんなに身に付けるのが難しいことではなくて、大学でやらなければいけないことかどうかもわかりません。

問題は大学でやっている教育と基礎的な能力をどうやって結びつけるのか。この間をどのように結び付けていくのか、ということが最大の問題だと思います。

これは、非常に単純化して言えば一種のマトリクスです。専門的な学力を身に付けるのが横軸だとすれば、縦軸はそれによってどういうコンピテンスができるのか。一種のマトリクスを作って、その中のどれの部分で大学教育がやっていくのか、という問題になると思います。しかし、そういう風に言うといかにもきれいに聞こえますが、それはかなり形式的な議論で、実態としてそういったものをどう結びつけるかは非常に大きな問題だろうと思います。

ただ、そういったものができれば、やはりこれからの社会に関しては更にそういったもの、そういった基礎的なものができていることが、更に卒業後の教育に結びついていく、そういった形での一貫性ができるということ

が望ましい、ということになるのは当然だろうと思います。

問題は、こういったものを結びつけるペダゴジーといえますか、ペダゴジーというのは教育ですけども、その教育論をどのように作っていくのか。これをどのように統合していくことができるのか、ということが問われると思います。

これについては私は一般的な解はないと思います。それこそ専門分野によっても非常に違うと思いますし、学年によっても違う。ただ一般的に言えば、こういったものをどうやって結び付けていくのか、ということが大きな課題になるのではないのでしょうか。

後の方で少し申し上げますけれども、一般に学生が何を必要としているか、自分はどのような授業が必要だという風に考えるか、ということについて、いまの学生は二つに分化しています。一つは、専門的な、非常に職業に直結するような知識を教えてくださいという要求。もう一つは、もうちょっと基礎的なことをしっかりと教えてくださいという要求です。ただそれは二つに分かれるべきではなくて、やはりそれは基礎的なコンピテンスを含めて、統合的な枠の中で考える、それがどのようにして可能か、ということを考えることが必要になってくるのではないかと思います。

次に、大学教育に何が求められているかという点ですが、一つ申し上げておきたいのは、キャリアとかインターンシップといったキャリア教育、そういった試みはやはり非常にニーズが高いということはいえると思います。将来のキャリアをテーマにした科目、大学での勉強方法を学ぶ科目、インターンシップやフレッシュマンセミナー、これらについてはかなり有用であるという評価が高いです。特にインターンシップについてはかなり評価が高い。かなりニュートラルな部分が多いにしても、しかし一般的には期待は高いだろうと思います。

ただやはり私は、基本は授業であると思います。キャリア教育と一口で言っても何をやっているのか非常に多様ですが、基本的にはやはりそれぞれの分野での教育が重要でしょう。そのときに、意味のある授業というのはどういうものだったかということから、いくつかのことが分かります(スライド 25)。

まず、最先端の研究成果を披露する、学生に示す。これの評価は全然高くないです。これは東大みたいな、学者になりたいという志望の人が多い大学でも、そんなに変わりません。東大ではこういうのが良い、という学生が2割くらいいますが、一般的にはやはりこういったものはあまり評価されない。ところが教師に聞くと、教師の方はこういったものが必要だと思っていますので、教師と学生とのギャップがここで一番生まれるわけです。

もう一つは、教え方がうまい、というも実は、教え方が下手だというのはかなり不満の材料になりますが、うまいから満足であるというものではない。一種の必要条件で、十分条件ではない。

積極的に必要とされているというのは、二つの方向があります。一つは、確実に学問の基礎を教える。きちんと基礎となる学問を教えろ、ということです。もう一つは、将来に役立つ具体的な知識、実践的な知識を教える。この二つが要求項目として先ほど申し上げたように出てきているわけです。

それからもう一つ、学生が授業に求めていることは何か(スライド 26)。一つは、専門以外のことも教えろ、というのと、専門を深く、というもので、先ほど申し上げたように二つに分かれています。専門を深く教えろ、というのが強い場合と、専門以外のことも教えろ、というのが二つの方向に分かれています。ただ、専門以外のことも教えろ、というのがマジョリティとなっています。

それから、授業は単に学びのきっかけではないのであって、この分野で必要とされるものはちゃんと全部教えろ、というのがあります。授業はきっかけで後は自分で勉強する、というような想定は、学生が望むところではない。

それからもう一つは、自分のレベルにあった授業。授業の意義やどういう意味があるのかということとちゃんと教えろ、という要求です。

つまり学生は、自分にとって必要な知識は何であるか、それがセットとしてどういう意味があるのか、ということとちゃんとと言ってくれ、と要求しているわけです。何かきっかけを与えてくれて後は自分で勉強する、という要求は実は非常に少なくなっているということです。

いわば自分に対するレリバンスといえますか、自分が何を必要としていて、それにどのように適応しているか、ということに興味を持っているということです。

ともかく、学生はこういった要求を持っているわけですが、先ほどの話に戻ってみますと、いま言ったような要求をどのように満たすかということについては様々な方法があると思います。

ただ重要なのは、先ほどから申し上げているように、学生が自分が何をやりたいのかということと、学習の効果には非常に大きな関わりがある、ということです。その中で、授業というものがどういう役割を果たすのか、ということです。

授業の効果は、主体的に授業に参加するかどうかによって実は非常に大きく違っている。今日は統計を持ってきていませんが、これは明確です。授業が自分にとって意味がある、と思って参加している人の方が明らかに授業に対する満足度も高いですし、勉強時間も高い。

それはやはり、ある程度の体系を生むんですね。自分にとって意味があった授業だと考える人の方が、授業から何を受け取ったかという評価がやはりかなり高いです。それは明確な違いがある。現代の大学教育の問題は、主体的な参加、勉強に関するインボルブメントをどう作っていくかということだと私は思います。

一般的に言えば、学習体験が深い体験があれば、自分がどのような学習をしたのか、それに対してポジティブに意味づける。それはやはり、自分の将来像を考えることにもなりますし、自分自身に対する自信も付く。それが意欲・興味を作って、また新しく授業に参加する意欲を作っていく。

恐らくコンピテンスというものも、こういったサイクルが働くことによって形成されていくものだと思います。それ自身を直接的に教えるというよりは、こういったサイクルが何回も繰り返されることによって形成されてくるべきものだというふうに思います。特に意欲に関してはそうだと思います。

それから、今までも何度か話題になっていましたが、自己認識とか将来の自分の役割に関する意識、言ってみればキャリア意識ですけれども、キャリア意識は早くできれば良いというものでもない。むしろ、固定化してしまって、大学でそれから動かないとむしろ問題を生じる。

むしろ大学教育というものは、そうした固定した観念から自分を解放して1回広い視野で見直して、その中でまた新しく自分の見方を作っていくという過程ですから、そういったものがある程度壊れるプロセスをちゃんと作っておかなければいけないわけです。とはいえ、壊れただけでは困る。それが何か結果をもたらして、蓄積されていかなければいけない。おそらく、そうやって蓄積されてくるものが中核能力だと思います。

問題は、このポジティブなサイクルをどのように作っていくのか。これが大学教育にとっては最大の問題だと思うんです。本来は、私の話の本題はむしろこちらになるのかもしれませんが、残された時間がもうありませんので、このへんにしておきます。

ただ一つ言えるのは、授業の方法もかなり意味があるということです。当たり前かもしれませんが、意味がある。例えば私どもの大学生調査で、「授業が分かりやすいように工夫されている」という授業が、よくあった、あ

る程度あった、あまりなかった、ほとんどなかった、という回答による調査がある。そこに、その授業が自分がいま物事を分析的批判的に考える力を作るのに、役に立ったか、ある程度役に立っているか、あまり役立っていない、役立っていない、という方法をクロスをして作ってみました。

すると、分かりやすく工夫されているということは、やはり、大学教育を受けたことで自分はその能力ができている、という感覚に結びついているんですね。これはかなり明確に結びついていると思います。また、参加的な授業といったものもかなり明確に結びついています。

もちろん、大学生の発達は、大学教育以外、授業以外に、サークルとかアルバイトとか色々なところにもあるでしょう。しかし当然ながら、授業はやはり一つの重要なきっかけになっていると思います。ただ、ついでながら申し上げると、こういう効果は、やはり学生のタイプによっても違いますし、それから領域によっても違います。

それともう一つ、我々の調査で分かったことがあります。一般的にいま、大学教育の革新については色々なことが言われています。例えばGPAですとか、出席を取るとか、少人数講義とか、あるいはサービ斯拉ーニングとか、色々なものがあります。

それで我々は、そういったいくつかの授業のタイプを経験したことと、それから授業に対する評価ということについて色々と関係を分析してみました。これはかなり確信を持って言えると思うんですが、統制型の教育方法と私は言っていますが、例えばGPAとか、きちんと出席を取るとか、学生が授業に来ないからきちんと来させるとか、試験に対してちゃんと準備をさせる、といったタイプの授業革新があるんですが、この効果は非常に薄い。学生が自分の能力の向上に対して抱いている評価が、低いんです。あまり大きな効果がない。しかもこれは、勉強時間の高校のときからの多少と比べてみても、あまり多くない。勉強をあまりしてなかった子に関しても、そういう統制的なイノベーションはそれほど利いているわけではないです。

むしろ効いているのは、参加型の授業とか、レポートをちゃんとコメントつけて返すとか、学生と教師との間のインタラクションがある程度作られているもの。これはある程度効果があると思います。統計的にはかなり明確に出てきます。ただそれも、もう少し細かく言えば、どういうタイプの学生にどういうものが効くかというのはいくつか違いがありますけれども、ともかく、やはり授業のあり方自体が相当大きなインパクトを及ぼしうる、ということです。

それからもう一つ。我々のこの大学生調査はかなり大きい調査で 5 万人近いわけですが、それをやった理由は、領域別、大学別に分析ができるように、ということで非常にサンプルを多くとったわけです。

その結果、やはり大学によっても大きな差があるということが分かりました。大学の教育方針というか、そういったものが効いているところがある。大学の個性みたいなものですね。しかも、それは必ずしも選抜性の高い大学がより強いインパクトを与えているとは限らない。やはり、その大学に特質みたいなものが何かあるのでしょう。これはもう少し具体的に調べてみたいと思っています。おそらく、大学がどのように取り組んでいるかということもかなりのインパクトを持っている。

先ほども少し言いましたが、勉強時間ですが、高校のとき勉強してなくても、結構大学になってから勉強する子もいるんです。高校のときに勉強してないから大学のときの勉強が決まってしまうという言い方は、その意味でも非常によくない。それは確かにそうでしょうけれども、やはり大学が工夫するところは十分にあるわけで、そういうところを見ていくことは非常に重要だと思います。

いずれにしても、より細かく見れば、そういった意味で様々な面から、違うタイプの学生に、しかも学生が自己形成のどういう時点にあるかによって、教育の仕方が与える影響も違ってくるんだと思います。

それからもう一つだけ。前後して申し訳ないのですが、もう一つだけこの調査で面白かったのは、意欲のあ

る学生ほど参加型の授業に出るのですが、参加型の授業の方が、どうも一般的に言うと成績が良くないんですね。多分それはそうだと思うんです。大教室でやっている授業の方が良い成績を出しやすい。熱心にやっ
てる授業は、あまり全員に成績を高く付けるということはないんだと思うんです。ですから、成績だけで見るとむしろ逆の結果が出てくるわけですが、それもやはり重要なことで、少くも成績を厳しくても、ちゃんとインタラクションをやるような授業には、そういったモチベーションのある学生は必ず入ってくる。そういった意欲のある学生に対しては、そういった教育は非常に効果がある。そうでない学生に対してどういうことがあるのか、ということについては、これからの工夫でしようけれども。いまの例に関していえば、意欲のない、意欲というか私のいうところの疎外型みたいな学生は、厳しいと思われる授業を取らない傾向が非常に明確に見えます。そういう学生をどのように導入していくかということが非常に大きな課題だと思います。

キャリアに関連していくつかの点を申し上げましたけれども、私どもとしては、非常に重要な課題がいくつかあると思います。

一つは、仕事と大学教育との関係をもうちょっときちんと調べてみないといけないということです。これについても、かなり大規模な調査をやるようとして計画しています。

それからやはり重要なのは、今回の調査を通じてみても、大学教育と学生がどういう学習行動をしているのかということ、体系的、恒常的にモニタリングしていくことは非常に大きな意味を持っている。特に、大学間のベンチマーキングといいますか、自分の大学だけではなく、大学の間で比べてみることはかなり大きな意味を持つと思います。

ですから、そうしたものを自分の大学の教育に還元していくというシステムを作ることは、これは大げさに言えば日本の高等教育のこれからの非常に大きな課題だと思います。私どもで行った、さきほどの5万人近い調査ですけど、これは約130大学からご協力を得たのですが、一応全部、大学ごとの集計と同じ専門分野の大学との比較というもお送りしています。私は、ここ2、3年で日本の大学の態度は非常に変わってきたと思っています。ちょっと前であれば、こういった調査には大体協力してもらえなかったんですが、今回はかなり協力していただけて、しかも終わってから、うちの大学もやりたい、という話も多かったです。

ただ、この調査結果をお返ししても、どうも使っていないみたいなんです。使うのが難しいのでしょし、分析できないし、分析した結果をどうやって学内のフィードバックにかけるかというプロセスもまだできていない。ここが最大の問題だと私は思います。

そういった体制をこれから作っていくというのは非常に大きな課題だと思います。我々の組織でこういったものを毎年定期的にやっていくというのはやはり難しいところがあるので、もう少し体系的にやる方法を考えたいと思っています。これも大きな課題だと思います。

私大連は今年の夏には、学内調査企画室のようなものをどうやって発展させてこういった機能を果たさせるようにするのか、という議論をするそうです。そういったところに関心が向かっているのは私は非常に結構なことだと思います。

ついでに申し上げますと、これはかなり国際的な傾向でして、アメリカでも今こういったことは関心を呼んでいます。

そういった意味で、これは私だけの課題というよりは、高等教育関係者全体にとっての課題だと思います。そういったことについてお考えいただければと思います。

それから最後に、大学教育のペダゴジーといいますか、先ほど申し上げましたように、専門教育ともう一方で

コンピテンス、それを何が中で繋げるのか。そういったことに関しても、これは専門の学者が考えるべきことだとは思いますが、これから考えていきたいと思えます。

以上が私のお話でした。ありがとうございました。